





日本現代文學全集・講談社版 99

---

野 間 宏 集  
堀 田 善 衛

編 集 整  
伊 藤 藤 郎  
龜 井 勝 一  
中 村 光 夫  
平 野 謙  
山 本 健 吉

日本現代文學全集

99

野間宏・堀田善衛集

編集

伊藤整  
龜井勝一郎  
中村光夫  
平野謙  
山本健吉



昭和40年5月10日 印刷  
昭和40年5月19日 發行

定價 500圓

© KUDANSHA 1965

著者 野間宏  
          ほつ た よし え  
          堀 田 善 衛  
發行者 野間省一  
印刷者 北島織衛  
發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽町3~19  
電話東京(942) 1111 (大代表)  
振替東京3930

印刷 大日本印刷株式會社  
眞印 株式會社 興 關 社  
製本 大製株式會社  
製函 株式會社 岡山紙器社  
背表紙 小林榮商事株式會社  
紙クロス 日本クロス工業株式會社  
口繪用紙 日本加工製紙株式會社  
本文用紙 本州製紙株式會社  
函貼用紙 安倍川工業株式會社  
見返し用紙 三菱製紙株式會社  
扉用紙 神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

野間宏集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

暗い繪……………五

肉體は濡れて……………四

第三十六號……………七

顔の中の赤い月……………金

地獄篇第二十八歌……………一〇

殘 像……………二二

哀れな歡樂……………二五

崩解感覺……………三三

悲しい錘……………三三

ジイドのラフカディオ……………一八

感覺と欲望と物について……………一八

詩……………一四

作品解説……………本多秋五 三七

野間宏入門……………久保田正文 三五

年 譜……………四〇

参考文献……………四三

堀田善衛集 目次

卷頭寫眞

筆蹟

齒車……………三〇三

廣場の孤獨……………三三九

鬼無鬼島……………三六五

鶴のいた庭……………三五

あるヴェトナム人……………三〇〇

自殺する文學者と殺される文學者……………三七〇

異民族交渉について……………三七五

詩……………三六

作品解説……………本多秋五 三六〇

堀田善衛入門……………久保田正文 三六六

年譜……………四〇七

参考文献……………四一四

野  
間  
宏  
集

地平深く 虹を投ぐ  
六々と 冬う返りて行く  
日やほの明り  
空は青く 一面の葉の茂る  
瀟々として

野

は明

の  
△

## 暗く繪

一

草もなく木もなく實りもなく吹きすさぶ雪風が荒涼として吹き過ぐる。はるか高い丘のあたりは雲にかくれた黒い日に焦げ、暗く輝く地平線をつけた大地のところどころに黒い漏斗形の穴がぼつりぼつりと開いている。その穴の口のあたりは生命の過度に充ちた唇のような光澤を放ちうずたかい土饅頭の真中に開いているその穴が、繰り返される、鈍重で淫らな觸感待ち受けて、まるで軟體動物に屬する生きもののように幾つも大地に口を開けている。そこには股のない、性器ばかりの不思議な女の體が幾重にも埋め込まれていると思える。どういふわけでブリュネーゲルの繪には、大地にこのような悩みと痛みと疼きを感じ、その悩みと痛みと疼きによつてのみ生存を主張しているかのような黒い圓い穴が開いているのであろうか。遠景の、羞恥心のない女の背の背のようなくぼみのある丘には、破れて垂れさがる傘をもつた背の高い毒茸のような首吊臺がよきよきよき生えている。そして長い頸と足をもつた醜い首吊人がひよろう高い木の枝にぶらさがり、長く伸びた爪先がひらひら地の上に揺れている。その傍には、同じように背の高い體の透いて骨に見える人々が長い列をつくつて、首を吊ろうと自分の順番を待っている。痙攣した神經をあらわに見せる磯巾着の汚れた頭のように、何か腐敗した匂いを放つて揺れているくさむら。

遠くの黒い地平線と交叉して立ちならぶ、木の葉一つない枯木のような首吊臺。その中の一番高い裸の手を擴げたような一つの首吊臺を眼がけて、飛び集つて来る聲のない黒い鳥の群、鳥達はこの地平線を越えて、この大地の上に姿を現わした時、あの醜い嘎れた聲さえ失つてしまつたかと思われる。その先頭の一羽の鳥は部厚い羽を不恰好に折りたたみながら、何か深い悲しみに捉えられて頭を垂れている。そしてひよろう長い首吊臺の上に足を揃えて身を停めようとしている。繪のほとんど中央には、磔刑にされたキリストの體が、半ば膝をつくように十字架の下に横わつてゐる。このキリストは、何の苦しみの表情も何の悲しみの表情もなく、むしろ無表情の薄つべらい顔貌を持ち、それを取りかこむ人々の群が黒々と畫面を取りまいてゐる。

またこちらには、爬虫類のような尾をつけた人間が股をひろげて腰を下し尖つた口の中から汚れた唾液をはきかけてゐる。その股のあいだには、やはりあの大地に開いてゐると同じ漏斗形の穴がぼかりと開いていて、その性器が、性器の言葉があるとすれば、その言葉でしゃべつてゐるように思える。そのすぐ後には四つばいになつた獣が、何か不潔な傷のためにいまにもちぎれそうになつた尻尾を、地面に引きずりながら、こちらを向けた顔だけは人間の形をして、苦しい嘆息の呼吸をつづけてゐる。

蛙の水かきの皮を五本の指の間にもつた人間、ひとでのよように幾本もの足を體中にはやしている人間、人間の足をつけて歩いてゐる魚、それらがそここに匍匐うてゐる。これらの人間はまるで性器以外には何等の營みの機關をもちえないかのようである。そしてその部分で食ひ、その部分で笑ひ、その部分でなげくのである。匍匐つてゐるこれらの尾のある人々の傍に、低い木の切り株が切り口から細い幾多の枝をさしつゝ、舌を出し、それは焦がされた慾望と腐敗した肉體の匂いを放つてゐる。ひとの股の形をした枝やもつれ合つた毛や、嘲笑する機關がその切り株の後のまばらなくさむらの中に



ちらついている。そのくさむらの前にやはり尾のある人間が、足を開けて坐り、何か自分の受ける苦しみあまりにも大きすぎるといふよりも自分の生活には苦しみ以外にないので、自分の生活を苦しみという言葉で表情する術さえ知らぬ無表情なそげた顔をして、自分の股の間にあいているあの暗い穴をしつと見つめている。暗い少しの華やかささえないあらわに淫蕩な眼が、これらの風景を何處からか見つめている。それは淫蕩などではない。歴しつぶされた生命がただどこか最後の一局部で生きている。こうした暗い不潔な醜い部分にのみ生きているのをその不潔な部分が羞恥しているのである。否、それは羞恥でもない。それは羞恥のような高貴な感情ではない。たしかにこの尾を持つた匍匐している人間の何處にこうした高い感情があるなどと云えるであろうか。あるいはまたそうした感情をあの尾のある肉體の何處の場所で表現するのであろうか。この醜い大地にぼつかり開いている穴は、ようやく人類のルネサンスを迎えようとする歴史の中で、ズタズタに切り刻まれたアミーバーがなおも生きつづけるようにようやく生れはじめ發生しつづつあつた個人、個體の跡形だというのであろうか。たしかにその黒い穴は何かを愁訴している。何かを訴えたいにしている。自己の存在をこうした醜い形の中にでも示そうとしている。あの尾のある匍匐うている人間が、何か奇妙な魂のように股の間に大事につけているこの穴。たといキリストの磔刑の姿の中にうがたれていてさえ不思議には思えぬ黒い輝きのようにうがたれ、開き、蠢動しているこの穴、また、其處には頸の短い乞食がいる。足の曲つた氣狂いがある。冷酷な賦役、重い岩のようにのしかかる農奴制の下に背中のまがつた農夫がいる。農夫はやせて、寒そうに汚いぶくの上衣に身を防いでいる。盲人がいる。乞食は大きな二股に開いた木の足をかけ、松葉杖にかわる短い棒をついでいる。乞食の背中には太い狐の尻尾が何本も縫いつけられて、歩くたびにそれが揺れる。それは揺れながら滑稽にひらひらする。これが乞食の笑いなのである。當時の支配

者スベイン王フィリップ二世の専制政治に對する嘲笑なのである。其處には人間への嘆きがある。そして人間の不正や、恐しい凡庸や、不公平に對する戦いがある。憐憫がある。さらに高い愛がある。これらの化物を支えている精神の中には人間の矮小な姿の中に閉じこめられて燃えている深い愛があり、貧困に對する痛烈な憤怒がある。無智と愚昧と冷酷に對する反抗がある。そしてそれらが苦惱の上に強い姿となつて、烈しい形をとつて、姿を現わしている。そして、此處には群衆への、集團への、民衆への強い執着がある。人々は集團以外としては現われない。祭の夜の、風景の中の點描としての、むれた蛙のような人間の集りとしての、鬻腰をつけた人間共の群としての、犬をつれた獵人がかえつてゆく農村の営みの中の人々の群としての、集團以外としてはあらわれない。そして、ここには民衆の最後の武器である笑いと諷刺があるのである。

これはフランドルの畫家、百姓ブリューゲルの繪畫集から深見進介の得た印象——奇妙な、正當さを缺いた、絶望的な快樂に伴うごとき印象、そしてまた、そうした暗い快樂の深い穴の中で無益がうめきもがいているとも云えるような印象の集りである。眞白のフランス綴の部厚い菊判大の繪畫集。これを深見進介に貸し與えた友、また彼と共にこれを繰り返し眺めた友は、ほとんどすべて若くして獄死しなければならぬという生涯をたどつたのである。そしてこの畫集もまた數知れぬ白い輝きを連ねて夜空を押し渡り襲うて来るB29の重い翼の嵐の下に、はね上る油玉と共に燃え、ただ曲りくねつた鉛のガス管や、紫色に焦げてゆがんだ裸の鐵骨や熔けて薄緑に固まつたガラスの塊りなどの間に、形もない灰となつて残つたのである。この寫眞版の繪畫集が、油脂焼夷彈の飛び火を浴びて、綴り合わされた繪の一枚一枚が、流れる黒い液體の飛び火の中に焦げてはがれながら燃えていつた時、この繪の中のひとつのような人間、犬の顔をつけた人間、尾をつけた裸の人間、あの暗い爛れたような穴を大事そうに股の間にもつている人間達が大きな如何なる力

をもつてしてもとどめえない火災のあついほてりの中で、すでに紙の下に廻つた小さい炎のために次々と火あぶりにされ、その汚い厭な正視し得ぬような肉體を焦がし、醜い體を火のためにさらに醜くけいれんさせるかのように至めて、しばらくは燃えてゆく紙の火の中に明かな形で姿を現わし、焦げる紙の上にあぶり出しの字のように黒々と線をつけ、そしてやがてそれらの體も火となつて消えていつた時、大阪全市は南の空から北の空へかけて、燃える炎であかあかと明らみ、急速な生命の危険をつたえる重い脅かすような響きをひろげながら、空を押し渡る機械の嵐が、幾千という巨大な鈍い光をたたえた重い翼の幾重もの重なりが、炎の明るみの中に次第に大きな大阪市の全景をくつきり表わしてくる街の上にもうもうとこめた火炎を越えて過ぎ渡つてゆき、この空の中を押し移つてゆく、限りないモートルと大きな機械の重みに押しひしがれながら消えてゆく、奇怪な穴をもつた人間共のうめきが、何處かその炎の中から聞えたかも知れないのである。このとき、この畫集の置かれていた工場の寄宿舎の居室が焼けてゆくのを見ながら、深見進介の心はいよいよ暗く、防空頭巾と鐵帽の下の彼の顔は、大きな戦争が彼の生命から呼び出した生き生きとした生命の緊張のために輝いてはいたが、さらにいつそう暗かつた。その時、ある軍需工場の一部門の責任者の位置にあつた彼は特設防護團のいかめしい服裝を着けて、この畫集の置かれてある部屋に移つてゆく炎を地面に立てた長い藁わら口に寄りかかるとして、苦しげに眺めていたが、すぐ消火作業のために團員を指揮する位置に走り去りながら、そのひとつでのような足をもつた人間達が、暗い闇の中で燃え上り焼け焦げるのを思うと、彼の心の中を何か震えおののくような感情が走り、彼の顔は鐵帽の下で、ちよつと燃える火の人間にんげんの焼け爛やけどれてゆくときの苦しげな表情を、赤々と燃える火に映えて示したのである。

この畫集に眼を止めたものはあまり多くはないと云える。といふのは、深見進介はこの繪畫集を大事にしていて、あまり親しくな

いものには決して見せることはなかつたから。あるいはまたこの畫集の意味を解こうと努力するもの、また少くともこの繪畫集の荷なう暗い感情に意義を認めるものは、あまり多くはないに違いないと思つたからであつたが、まずこの畫集を彼に貸し與えた永杉英作、その友羽山純一、その友木山省吾、其の他二、三のものがこの畫集を眺めたことがあるだけであると云える。彼は始終この畫集を手元に置いてはいたが、學校生活を了え社會に出るようになってからは、かたくなに誰一人としてこの畫集を見せようと思ふ人間には出會わなかつたのであつた。學生時代の友、永杉英作、羽山純一、木山省吾、これらの人々は彼が京都の大學に在學中、共に學び、共に闘い、共に苦しみ、時には共に放蕩し、また、共に意義なく時間を過した人々であつた。支那事變の勃發の前後にわたる彼等の青年の時代、それは青年の強烈な精神が日々に光を放ち、ことごと激越な調子の表われる、排他的な口論と嘲笑と自己嫌惡と傲慢との奇妙に混合した三年間であつた。友人達は若くすべて偏狹であつたが、その偏狹によつて皆は、美しい精神を保持し、互いに切磋した。世の中にあつては正に何億の金に見つても買えないあの純眞を惜しげもなく使い果し、不思議な表現ではあるが本能的な誠實の衝動が現われると、如何なる障害も止めえず、如何なる恐怖も阻止しえぬ生命の自由の羽ばたきが、人々の額を輝かせていた。これらの友は何れも、青年時代のこの生活を何時までも持續しようとしたため、戦争が進行するにつれて、あるいは民間の刑務所につながれ、あるいは第一線から飛行機で内地に送られ軍の監獄に收容せられたのである。しかし、これらの人々の眼も、それほどしばしばこの畫集に注がれたとは云えないのである。といふのは、この畫集を見るのは、あまり楽しいものではなかつたから。むしろこの繪集は、見る人々の各自の置かれている社會的な位置、その家族の關係、各人の女との交渉、各自の思想等の暗さをそれぞれ各自にあま

りにも強く思い起させたから。

深見進介が初めこの畫集を見つけたのは永杉英作のアパートの一室であつた。それはその部屋の右隅の大きな白木の本棚の一番下の段の右端に置いてあり、いつも緑地の蔽い幕の端からはみ出て、その部屋に入る度にその純白の部厚い大きな畫集の背が彼の眼を射るのである。形が大きく本棚の上の段には入らないので、永杉英作は茶碗や食器類を置くのに使つている本棚の下段の一番右隅に置いていたのである。深見進介はときにひとり、その本棚からその重みのある畫集を取り出し、また時に共に頁を繰り、時に共にその繪について語り合つたのである。その畫集の中の暗い、嘆きのような、痛み、うめき、うずいている人々の多くの姿は、彼にあらわに、彼自身の苦しみを思い起させ、彼はそれらの繪を見まいと思ひながら、しかしやはりその繪のもつ何か不可思議な力にひかれてその頁を繰ることになるのである。しかしこのブリューゲルの繪が特に彼に強くせまり、彼の心に強い力の反射のように照りつけて來たのは或る夜のことである。

當時彼は全く切りつめた生活をし、彼の不幸な戀愛はほとんど破綻に近づいていた。そして彼の幾分長形の顔はその感情が激越に調子づいてくると、何かの拍子でほんの一瞬救われたように頬のあたりが少し美しく見え、くぼみの深い眼窩に溢れる涙でしばしば洗われるという状態であつた。こうした熱い涙が顔をぬらす時、彼は肘や尻の部のすりきれて光つている黒サージのみすばらしい學生服姿の自分を忘れ去つたが、その涙の訪れぬ不斷の時期には自己に對する過信と絶望、謙虚と傲慢、野心と敬虔とに交互に見舞われ、烈しい活力から烈しい疲労に變る時を過すのである。そしてそれらの根柢に、自分自身に對する不満と社會制度に對する憎惡があつた。その日も深見進介は朝から何時ものように焦躁を感じ自分のそうした感情を制御しながらも幾分いらいらしていた。青年によく見られる自分の周囲のものがすべて自分に敵對しているような感情が彼を襲うていた。

大阪府廳に席を置き、何時までも小官吏の地位にいる父がその朝手紙を寄越し、この月は母親が病氣のため思わぬ費用が要り、節約第一にして欲しいと云つて來たのである。讀書費は今月はなしに濟ませて欲しいと云い、最後にこれは手紙の度毎に父の書く文句であつたが、思想問題に注意して日頃の賢明を以て徒らに徒黨に與せぬ方針を堅持されたと結んであつた。深見進介は晝近くその爲替を封入した書留郵便を受取つた。そしてその手紙をよこした父に腹を立てた。しかし彼は自分のその怒りの中から金錢の壓力が、彼の身をしめつけて來るのを感じた。それは或る意味で哀れな醜い自由を失つた感情であり、彼は自分のその感情の後に、汚れた光を放つてゐるような父の姿を見出し、それをじつと見つめるようにした。父の姿が浮んでくる。それはその金錢の壓力感の中から形をとり、現われてくるのである。それは金に壓し潰された種族の顔である。優しい心の働きを金に奪い取られたものもつ顔である。金の中の老衰の表情である。左にゆがんだ長い鼻隆、臉の肉の薄い眼、短い眉。この眼は遠くを見ない。人々の顔の中で何を讀み取ろうとするのか、しばしば小さく動く。しかも哀れに小さく動く。茶色に近い瘦せた頬、それは卑屈に屬し、硬化した咽喉のあたりの皮膚、これは勞苦に屬している。そしてこれら父の表情を縛つてゐるのは金錢である。

深見進介はいわばその父親の顔を心の中に抱きながら、その一日を過したのである。學校の講義に出たがそれは型通りに終り、すぐ宿に歸り、ドイツ語の勉強を始めたがはかどらず、一日を無爲にすごすという思いが、彼の心を堪え難いものにした。そして夕暮の氣配が部屋の窓や机の上の書物に影をうつけ始めると、深い悲しみというような一種の落ちつきさえもない、價值などに全く關係のない焦躁に貫かれて、何時ものように永杉英作のアパートに足を向けた。しかし深見進介は永杉英作のアパートに着くまでに食堂に立寄り其處で再び金の問題に出會い、そしてさらに、その當時の思想運

動と呼ばれる小さな哀れな動きに出會わなければならなかつた。街の金貸しと街の思想運動家達が彼の途中に待つていたのである。そしてそれは金貸しと思想運動家と、こういう風に二つを並べて書いても少しも不思議ではない程どちらも哀れな汚れた存在であつた。

## 二

既に日の暮れた神社の境内の曲りくねつた坂道を下り切ると、小さい暗い煙るような冷い暈をつけた電燈が電柱の高いところにあつて、十字路になつた少し廣い道をぼんやり照している。その角の山際に沿うた二階建の屋並の三軒目の表口の硝子戸が明々と光を道に投じている。深見進介は硝子戸を開け、意外に明るい食堂の土間に入つて行つた。安物の白塗料を用いてある部屋の新しい四圍の壁には白い電燈の光が照り返つている。店の間には左隅のテーブルの角の所で高等學校の學生が、空になつた食器膳の上に夕刊を擴げてテーブルに乗りかかるようにして讀み入つている他、客は誰もいない。妙に時刻はずれの空氣が部屋を充たしている。厚い松材に少しそり返つて割れた六尺テーブルの上に、粗末な長い竹箸を入れた竹筒の脊の高い箸立や、白い安物の湯飲み茶碗をふせた、木のくり抜き盆、アルミの大きい湯沸しが冷い影をつけている。この食堂に足を入れた時、深見進介の中背よりは少し大きい身體をつつんだ垢じみた學生服の姿は、光の中にぱつと浮び出、一步敷居をまたいで店の奥の方を窺つている顔は電燈の光で不斷よりは陰影の深い形を見せ、長い眉根やこめかみ、上方の邊りの曇つた暗い表情の中に、若いもの達の顔に表われる、あの自意識と對人意識の皮膚の緊張が走るように思えた。

「いらつしやい。」親父の聲が太く響いた。深見進介はテーブルの横を廻り、顔をふせるようにしながら、眞直にその聲の方に寄つて行つた。臺所口につづいた中の三疊の間の仕切りの暖簾の間から大きな鼻と大きな耳をつけた大柄の親父の顔が、客の姿をしつと見定

めるように覗いてゐる。それはまるでその親父の大きな鼻だけが、其處から覗いてゐるといふように思える。《鼻奴、鼻奴》、深見進介は何故といふこともなく心の奥でこう思つた。するとこの言葉と共に、その時まで彼の心の深みに沈んでいた一つの押しつけるような壓力があらわな、眼に見える力となつて現われ、彼の行手をさえぎるかのようと思えた。それはあらたに姿をもつて現われた金の壓力であつた。深見進介の足は一瞬土間の眞中で止つた。彼は彼の心の片隅に自分の父親の顔を思い浮べた。あの短い半白の眉の中の弱い、伏せがちの父の視線が浮んで來た。「徒らに徒黨にくみせざる方針を堅持されたし。」この父の言葉が彼の頭の中をちらと走り過ぎた。しかし彼は頭を左右に振つてこれらの言葉や姿を自分の心から振り落すようにしながら、親父の方に近寄つて行つた。奥の間の騒ぎが聞えて來た。深見進介はそれに氣づいた。そして彼は何故か自分の姿を隠そうといふ氣持に襲われた。それは彼の同級生の小泉清達の集りであつた。店の間につづいてゐる、少し暗い電燈の六疊の間で將棋盤を圍んで、何時ものように食後の時間を過しているのである。深見進介は言葉もかけずにその傍を抜けるような氣持で黒と赤の染分けの暖簾の方に進んで行つた。そして暖簾を分けて上半身を斜めにしながら、胸から上を三疊の間の親父の大きな角火鉢の上に突き出すようにした。「今晚は。」深見進介は低い聲で云つた。そしてまるでこの厭な親父の鼻の形を見るのが自分に課した罰でもあるかのようにじつと親父の顔を見つめた。

「やあ、いらつしやい。」親父は顔を上げた。が、彼の厚いふくれた右頬の上を狼狽の影が通り過ぎた。そして、次の瞬間訪問者の心を一撃の下に打ち挫くような堪え難い色が眼に表われ、顔全體にひろがつてゆくように思えた。

「やあ、いらつしやい。どうしたの。深見さん、今夜はえらく遅いじやあないか。もうおでんの火、落してしまつたけれど、それでよけりやあ、お上んなさいよ。」親父の冷い顔の肌の下から笑いの表

情が表われて来た。しかし深見進介は自分の心の底まで冷し込んでしまふような先刻の親父の顔を忘れることは出来なかつた。親父はたしかに彼がこの暖簾をくぐつてこの三疊の間に姿を現わすことを豫期していなかつたのである。というのは親父は二重の眼をもつていたから。食堂經營の主人の眼と高利貸の親父の眼と。そして深見進介は彼の金融口座帳に名を載せている客ではなかつた。又そうした種類の客になる見込みのある客でもない。そうした金を借りに来る學生はもつと大まかな、もつと家庭のいい、「行き當りばつたり」式の、親父の言葉で云えば、「その日の向き向きでことをやる人間」であつた。

「うん、ちよつとお願いがあつて来たんだけど。でも先に食事を済ませようかな。」深見進介は笑いのもどつて来た親父の顔を見つめながら云つた。

「食べてくかね。火は落したんだけど、まだ冷えちやあいないだらうよ——まあ、上へお上りよ。」

「うん、食べるよ。せつかく寄つたんだから。」

「小泉さんや谷口さん。皆さん奥に来て、賑かだよ。お上りなさいな。」

「うん、上らせてもらうけど、何があるの。」

「なにもないんだよ、生憎今日は。おでんだけなんだがね。」

「何でもいい。おでん貰おうか。けど、その前にちよつと親父さんに頼みがあるんだがね。」

「おでんだつてちよつとも、冷えちやいないよ、いま火落して、俺も一休しようとお腹を落着けたばかりだからね。」親父はわざと氣づかぬ風をしている。親父の顔はすでに餘裕のある柔和な笑いを取り返し、それで武裝している。たしかにこの笑いは商賣用の武裝である。この笑いの後に半ば機械になつた彼の硬い心がある。長い失敗の人生の後でなお頑強に人々に抵抗しようとしながら、身體に比して極めて小さい魂を金錢に掴まれた男の心、金錢への執着がきしむ

ような響をたてる機械の心があるのである。そして、この小さい金錢の機械は學生の下宿に乗り込んで、辭書や衣類や時計やその大事な持物を抵當物件として取り上げる時、極度の疲労から古ぼけた埃をかぶつた街工場のミールングのような音を立てることがある。しかしこうした疲労を伴う興奮がかえつて彼の背骨をしつかり内から支えて呉れるような感じが彼に少しの後悔も起させず、いつそう彼を驅り立てて彼の内の残り少ない「人間」を奪ひ去つてゆくのである。こういう一錢銅貨の色にも似た顔色をもつた男は日本の社會にはしばしば見られる。これは日本の社會の奥底にある造幣局で製造される多くの人間の一人に過ぎない。そして先刻深見進介がこの親父の鼻を見ながら彼の父の顔を思い出したというのも、彼の父とこの親父とが一方は金貸しであり、一方は借り手に廻る方でありながら、社會の同じ場所で作られた人間であることに變りはなく、彼等の顔には同じ銅貨の模様が打ち出されているからであるとも云えるのである。

「どうもこの間から體の調子が悪くてね。」深見進介はまつすぐに親父の鼻を見つめながら、わざと氣づかぬ風をしている親父の心を感じ取り、話を持出すのを止めて云つた。

「風邪でも引いたんじゃないの。顔色がよくないね。」

「……………」

「深見さんも體は強い方じゃないね。頸の長いものは體は華奢だつて云うから。」

「……………」深見進介の心は次第に息苦しいものになつて来た。なぜこのような何の意味もない話をつづけなければならぬのか。何が故にこの親父に背を向けて出て行くことが出来ないのか。ただこの親父に食費の借りがあつたということが、これ程までに自分をここに縛りつけるのか。彼は同じように親父の渦巻いた太い眉や左上の電燈の光の中に浮き出た肉の高い左頬などを眼を据えるようにじつと見つめていた。



「……………」

「學生さんだつてこの時節じゃあ、やり惜いのはよく解つてるし……。しかし學生さんは將來が身上き……。楽しみだよ。」

「將來がね。」深見進介はただ金銭に打ちのめされた心に落ち着きを取り返そうと努めながら云つた。「その將來の身上が就職難なんだから世話ないよ。親父さん。」

「そう云つたもんでもないよ。自然に先は開けてくるよ……ええと、ちよつと四十六圓二十銭になつてるから、三圓八十銭のお釣りになるがね。じゃあ頂いとくよ。どうも……。」

「ほんとに濟まなかつたね。」親父の笑いの下の厚い錆びた顔が深見進介の心をさえぎつていた。彼はまともにその顔の奥にある奇怪な一つの心によつつかつていた。それは彼の未知の心であり、若者の柔かい芽のような心を壓しつづす測り難い心の在り處であつた。そして釣銭を握つた右手が親父の暖い手の平に觸れた時、彼は自分の手が慄うように後しざりするのを感じた。

「いや片づけときゃ、どつちも氣持がいいもんだよ。まあ奥に上つてゆつくりしておゆき……おい、千代子、深見さんにおでんの定食、暖めてあげておくれ……。何、今、ちよつと湯に行つてるんで、すぐ歸つて来るよ。」

### 三

この鼻の親父との愚かな恥ずべき交渉とその時味わつた惨めな感情とを深見進介はずつと後まで心の底に秘めていた。《俺は何も知らないのだ、何もかも。》これが彼の思いであつた。一體親父の大きな鼻は彼に何を教えようとするのか。半ば錆びついたこの人間の機械は彼が世の中に出て行つた時、そして昂然と若者の頭を上げて世の中に挑戦した時、あまりにも多く彼の周囲を取りまいたのであるから。彼が暖簾の前を離れ小泉清達の集つてゐる奥の間の方に歩きはじめた時、彼の少し窪んだ兩眼の下の暗い暈のあるあたりには、

は、かすかに微笑が浮んでいたが、それはむしろ取りつくるうた微笑であつた。自分の金銭に對する無智に向けられた金銭の嘲りであつた。彼はしばらく今自分の前で起つたことが何であつたかをはつきり自分に知らせようとするかのように、また痛みつけられた感情に足を取られたかのように、親父の姿を隠してゐる暖簾の前でじつと立つていた。が、やがて身を廻らせ奥の間に足を向けた時、小さく身體が慄えるのを感じた。親父の心の一つの特別な動きに觸れたような感じを感じていた。彼は心が蔽いを取られてあらわになり、そのあらわな心のきつい接觸を彼はどう處置していいか。それは侮辱でもなく羞恥でもなく、その何れでもあり、自分の金銭に對する安易な學生達に共通の考え方を激しく揺ぶられたのである。金は社會の骨格であると論じながら金になつた心の存在を知りえない學生達の心を持つ深見進介は、日頃金銭については他の學生よりも遙かに深い身に痛みを感じる考え方を持つてゐると自負していたが故に彼は資本論や労働者階級の狀態など、こういう種類の書物を読みながら俺は結局何も知らないのだとその後もこの時のことを考へて思うことがあつた。《鼻奴、鼻奴》彼はそんな時心に云つた。《江戸つ子の鼻奴》——深見進介の衝き上げられた心の片隅で熱を帯びた暗いこの言葉が、汚れた響きを發してゐた。彼はじつとこの汚い言葉を胸の中で見守るような氣持で、奥の間の上り口に顔を出した。願ひでいた學生達は急に笑聲を止め、一齊に皆の顔が彼の方を向いた。

「よう。深見大人の御入來。」赤松三男の揶揄の聲が飛んで來た。

「よう。永杉派。」誰かが怒鳴つた。

「永杉派がどうしたというんだい。」暗い疊の上から白々と聲が浮く。

深見進介はしばらく會わなかつたこれらの同級生達のあらわな敵意をまるで心が瀧に打たれたかのように感じ取つていた。彼は自分の前に展げた級友達の集りの風景を、何か挑みかかるような眼つき

で眺めた。そして若者の心をとすると訪れるあの烈しい敵對の心でこの風景の中の一人一人を上から見下すように見つけた。暗い電燈の真下に、赤松三男と谷口順次とが足附きの將棋盤を圍んでゐる。その横に美澤多一郎が足を組んで本を横げている。美澤の後に床の間を背にして足を投げ出し、兩手で斜後にそれさせた體を支え、眼をつぶつた小泉清の顔が鈍く輝いて見える。江後保は一番奥の縁側寄りに身體を横たえている。暗い光の中でこれらの人々の顔の部分だけが煙草の煙に動く暗い光を反射して輝き揺れているように見える。《鼻奴、鼻奴》深見進介はなおも彼の中にうめいている言葉の嘲りのように自分の心に言い聞かせながら、人々の輝いている顔を次々と見渡していつた。

「いつまでも、突つ立つてんと、まあ上へ上がれよ。」赤松三男が云つた。圓い鼻の上に眼鏡がずり落ちそうになつてゐる。

「おばさん。」細かい飛白の谷口順次が、膝の上で將棋の駒を鳴らしながら、盤を覗き込んだまま云つた。「おばさん、じゃなかつた。じゃあ、娘さんでもなおさらないやね。千代子さん、深見さんがおでんの定食ですよ。」谷口順次の聲には嘲りの響きがあつた。

「おでんの定食。」寝轉んでゐる江後保が、料理屋の仲居の口調を眞似て云つた。

「おでんの定食。」將棋を見るでもなく膝の上に岩波文庫を載せ、唇を圓めて煙草の煙の輪を造つては時々將棋盤に吹きかけていた美澤多一郎が江後保の口調を引き取つて云つた。

「おでんの定食。顎の用心。」そして、深見進介の方を向くと、何か笑いを堪えているような細い頬が、奇妙に窪み、卑しい嘲笑するような表情が其處に見られた。

「顎の用心。」谷口順次が調子をつけて繰り返した。

「顎の用心。」赤松三男がそれに和した。そして皆の顔の上を何か光の波のように、薄ら笑いが次々と傳つてゆくように思えた。

「顎の用心か。ふふ……。」小泉清の眼が開いた。そして上半身を

兩手で支えた姿勢のままさも物憂げに云つた。

「誰だつたかな、この間教室で云つてたじやないか。弱弱の深見か、深見の弱弱か、か。」彼の顔は、電燈の圓笠にさえぎられた光線のため煙草を喰わえた大きな口のあたりの他、暗い光の中にぼんやりしてゐた。

「へえ、何だか男おとこ女め川がわみみたいな話じやないか……。」谷口順次が云つた。しかし誰も答えなかつた。そして一座に沈黙が來た。

「それでおしまいかい。」深見進介はどつと自分の中の言葉を口の外へ押し出すような氣持で、しかし一語一語をはつきり發音しながら云つた。敷居に腰を下し、級友の一人一人の顔の上に視線を移しながら、彼は怒りに燃えて來た。

「……………」皆は黙つて答えない。そして、冷い視線が上り口の深見進介の上に集つて來た。

「それでおしまいかい。革命家諸君。」深見進介はゆつくりとしゃべる言葉の中にあらわれた敵對の心をこめて云つた。「何か一言云わんことには納まらんという連中にも困るじやないか。それにしても俺にも變な人氣があると見えるね。」そしてこの革命家諸君という嘲笑の言葉が皆を激昂させた。

「へえ。云いましたね。云わりましたね。」小泉清は、彼が不斷は用いない關西辯を用いることによつて、そこに抑捺の氣持をこめながら、斜めに倒していた上半身を起した。顔の位置が動いて、暗鬱の色は斜めが幾らか憂鬱を保つた長い形のいい顔が電燈の光の中にばつと現われた。瘦せているが強靱な身體。黙つていると氣むずかしそうなかなりの年齢以上の表情ではあるが、力強い臉はその表情を裏切り若さが溢れていて、疲労の影はつけてゐるもの決してこの人間は對人關係において消極的ではないことを示している。着込んでゐる學生服の肘のところを擦り切れて、下に着けた毛糸のシャツが覗いてゐる。深見進介は黙つた。小泉清の體をもてあましてゐるような動作の中にも、彼は小泉清の壓しつけるような神經を



感じた。

「問題はね、深見進介の内部にあるのではなくて、外部にありさ。」  
小泉清は、深見進介の射抜くような眼をじつと見返しながら落ちついた調子をわざと人々に見せびらかせているかのように、ゆつくりした調子で聲を低めて云つた。強い自尊心の破片がその聲の中にはあつた。

「甘い菫蕪には顎の用心。」谷口順次が盤の上の飛車を大きく動かしながら云つた。「ひとの悪口は、どうもわしや苦手やわいな、と。」  
横顔の薄い彼の顔は尖つた鼻の部分がきつい線をつけて電燈に光つている。彼は時々胡坐の膝を小刻みに揺り動かしながら考えこむこともなしにさつと駒を動かさせた。

「顎の話なんかしなさんなよ、失禮だわよ。美澤多一郎がおどけた調子で云つた。一座はどつと笑いを上げた。深見進介は顎という渾名を持つていたのである。

哀れな學生達の自尊心を點綴した食堂の奥の間の風景が展かれていつた。青年の集りに特有の各自が各自の獨自性を相手に認めさせようとすする工夫、それに伴う心理的抵抗、及び精神の焦躁が暗い電燈の下でひしめいていた。しかしながらそうした青年の心理の闘争以上にこの深見進介の經濟學部の同級生達には、深見進介を共同の敵と目しているような空氣が流れていた。そしてその空氣を導いているのが小泉清であると認めることが出来た。しかしまた小泉清に限らず同級のもの達は、特に成績の優れた鋭敏な神經を持つ者は、深見進介に威壓を感じ、それが積ると自然そうした一種敵對に似た感情が作られるのであつた。それは主として深見進介の沈黙勝ちな交友、日常生活の不當な輕視、學生運動からの奇妙な逸脱から生れてくるのであつたが、さらには彼が自分の苦しみや痛みを他の人々のように友に明かしたり、叫び聲に上げたり、明らさまの放蕩に表現したりせず、孤獨でそれを踏み堪えているような態度からもたらされるのであつた。そして、人々はそれを頑固な魂の封鎖として各

自が信頼を失つているかのように感じ、若者の怒りを感じるのであつた。

「何を云やがる。」深見進介が叫んだ。皆の顔がぎよつとしたように向くと、土間の明るい光を背にして、深見進介の暗い顔には怒りの感情を超えた羞恥の感情が現われている。

「何を賑やかに騒いでいなさるの。」中の三疊に通じる唐紙戸が開き、女主人がお膳を運んで來た。量の少ない髪を後で無雜作に束ね、狭い富士額の生え際の際のあたりが湯に濡れて輝き、湯上りの化粧のない淺黒い顔が電燈の笠のあたりに近づくと艶々と光り、引き締つた皮膚はかえつてその顔に少し固い感じを與えている。足袋をはかぬ小さい素足が木綿飛白の下に覗いて、その恰好のよい足のあたりにかえつて女の感じが現われ出ていた。

「いや、深見が菫蕪のおでんを待ちかねていてね。」美澤多一郎が自分の顔の眞近かに、女主人の右腰の柔かい線が來たので、つと眼をひそめ顔をそらせるようにしながら云つた。

「それで菫蕪の深見さんか、深見さんの菫蕪かなの。ほんとに深見さんは菫蕪がお好きなのね。ふふふ。おでん火を落したんで少し冷えてるかも知れませんが。深見さん。辛抱して下さいな。」お膳を据えながら顔だけは臺所へ向け高く響く聲を掛けた。

「君ちゃん、お母ちゃんお醤油忘れてきたわ。お醤油の壺もつて來てちようだいな。そら、その臺所の右の戸棚の上から三番目の段にあるのよ。」そして急に電燈を背にしたので右頬のみが生き生きと輝いて深味のある顔になつた女主人が、その顔を深見進介の方へ返しながら云つた。

「え。お上りなさいな。一人だけのけものみたいにそんなとこに腰かけたりなさらんと、奥へお上りになつたら。」

「ええ。上ろうかな。でも、まだ行く所があるので、やはりここでやります。靴を脱ぐのがやつかいですから。」深見進介は編上靴を上り口の板の處でわざとぶらぶらさせながら云つた。